

[教育方法一般]

自己教育力を高めることで学力向上につなげる

- 自己診断チェックの機能化を目指して -

弓納持 豊*

1 はじめに

今、私が特に心に留めているのは、自己教育力を身に付けることによる学力・授業力の向上である。河野によれば、「自己教育力という言葉は、自己学習、自己形成、自己啓発などの概念を総合したもの」とのことである。それらを念頭においた上で、筆者は、「主体的に学ぼうとする意欲とそれを継続していく意志」を自己教育力ととらえ、その力が授業において発揮されることが重要だと考える。釧持は「学習のねらいを児童にゆだねて課題を追求して進めていく場合には、児童の中に一人学びの意識と学び方の徹底がされていることが条件となる」と提唱している。この一人学びの意識の高さと学び方の徹底こそが、自己教育力の土台となると考える。また現在、新潟県が進めている、地域に信頼される特色ある学校づくりの重要課題である学力の向上には、この自己教育力の育成が近道だと推察する。本校の保護者の声から、学校に一番期待するものは、学力の確かな定着であると分かった。児童に学習意識調査をしたところ、よく分かる授業や楽しい授業によって、自分の学力が伸びると信じる児童が90%を超えた。従って、学習意欲と授業改善意識を高め、地域が望む学力の向上を実現することで、児童、保護者、教師にとって魅力ある学校づくりにもなる。

最近では、平成19年8月に新潟県内小・中学校に配布された「分かる授業づくり」のリーフレット（県教委発行）の中に、「教室での児童の学習態度と学力との相関」が示されている。全県学力調査の結果から、「授業中に自分の意見を進んで発表している児童ほど、学力が高い」という分析である。私は、これを短絡的に置き換えて、主体的に学ぼうとする意欲や意志が継続できる児童は、学力が高いと受け止めた。これまで担任してきた学級の実態から、この点には異論はない。ならば、意図的に学習意欲を高め、それを継続させることを仕組むことができれば、おのずと学力も向上していくと仮定できる。筆者は、ここに自己診断チェックを機能化させる価値を想定している。河野は、自己教育力の特色として、「学習者自らが自分の学習状況を客観的にとらえ、自分の学習要求に合った教育計画を立案し、それに基づき自らを教育できるようにする経験を通し、その能力を育成する。つまり、自らが主体的に学習することから、自らが自分自身を診断し、自らを計画的に教育できるようにするところ」と指摘している。この具体策として、精選されたチェック項目をもとに、自分の力を自己診断したり、自分の目指す課題を明らかにし、追求しようとする意志を支えたりすることで、自己教育力を高め、学力の向上を目指す。

2 目的

- (1) 学校規模や所属校の学力課題などの学校状況によって、適宜修正できる自己診断チェック表の原本を作成する。教師の授業力と児童の学習意欲などの診断を同一時期に行うことにより、それぞれの立場での課題やよさを明らかにし、教師と児童双方の自己教育力をはぐくむ体制を強化し、自己診断チェックの機能化と学力向上との関係を検証する。
- (2) 児童には、年間を通した学習意識・意欲の変容、教科単元内での達成率の向上、総合的な学習への導入など、あらゆる機会に診断チェックをさせる。そして、数値やレベルの上昇に目を向けることから自己診断の楽しさを全校児童に味わわせ、自分の力が伸びる喜びを実感することと学力向上との関係を検証する。

* 糸魚川市立南能生小学校

3 実践の概要

(1) 教師が自己教育する意識をもつ際の目標設定に役立つ「授業力向上チェックリスト」

叙持は、教員育成プログラムの流れとして、以下のような9段階を考えている。筆者は、これをより効率的に進めるために、校内研修として職員一斉に行うもの(①, ⑥, ⑦)と個々の自主性に任せるもの(①, ⑥, ⑦以外)とを区別し、全職員に提案した。

① 診断チェック	⑥ 年間計画
② 課題の明確化	⑦ 研修の在り方の説明
③ 課題内容の分析	⑧ プログラムの実施
④ プログラム化に向けての課題設定	⑨ プログラムの再構成
⑤ プログラムの内容把握	

① チェックリストの作成

チェック項目として参考にしたのは、平成15年2月に上越市教育委員会が紹介した「授業改善基本チェックリスト」である。これを自校の校内研修テーマである国語科の内容に改良する。中味は項目数62個、診断所要時間15分程度(A4判3枚)に精選し、紙面量をできるだけ減らすことで、見た目を感じる直感的な負担感を軽減する。また、全項目を一定のまとまりごとに分類して提示することで、回答者が校内で取り組もうとしている活動概要を把握しやすいように工夫した。一つの分類枠は、全項目を回答することの疲労感や倦怠感を防ぐため、3つ程度のチェック項目数とした。

② チェックリストへの記入

項目に対する回答は4つのレベルとし、奇数個だと中間点を選びやすいという心理面に留意した。エクセルファイルで原本を作成し、上位2つのレベルを肯定的診断ととらえる。自動集計により得た割合を到達率として表し、全入力後に表示される到達率を見る楽しさを意識した。(図1参照)

1回目の試行では、自己診断する内容を、チェック項目を追いながら理解することを重視する。初回の結果は、教師の立場から謙虚に自己評価する姿が目立ち、本校職員の得点平均は50点に満たなかった。しかし、ここで大切なのは、高得点を得ることではない。たくさんのチェック項目の中から、「よし、自分はこの点をがんばってみよう」という自己教育の目標をはっきりもつところにある。実際に職員からは、「…の大切さを忘れていた」などと、課題意識を改めたつぶやきが多く聞かれた。

③ 試行の結果

肯定的な自己診断の割合を到達率として表示するシステムにした結果、年間の推移は表1のとおりである。

〈表1 肯定的な自己診断の年間推移〉

対象教員	H18.5月	H18.8月	H18.11月	H19.2月	最終実施において、筆者が注目した感想
青年層	35点	50点	60点	54点	・がんばらなくてはいけないことがたくさんあると分かった。
中堅層	55点	65点	52点	60点	・どの程度できていることが合格点に該当するのか迷う。
壮年層	40点	45点	51点	50点	・まだまだ勉強不足だと分かった。

また、一年越しの同一期に実施し、比較してみた結果は表2のとおりである。

〈表2 肯定的な自己診断の年間比較〉

対象教員	H18.5月	H19.5月	19年度の実施で、筆者が注目した感想
青年層	35点	49点	・普段の授業の見方とは違った視点を得ることができ、授業への考えが広がった。
中堅層	55点	65点	・とりあえず、少しだけこだわりをもって授業を進めることができた。
壮年層	40点	45点	・授業を大切にしたいという気持ちが高くなったような気がする。

④ 授業力を向上させようとする意識の変容

表1・2から分かるように、職員全体としての目標到達率80%にはとどかないが、そこに到達しなくても、各自で獲得した得点の上昇や、個人の目指した観点での向上があれば、十分満足と考える。また、各感想から意識の高まりが認められる。本校には5つの教育期があり、それに合わせて、診断チェックする機会を設けてきたが、特に個々の

授業力向上チェックリスト【指導者用】

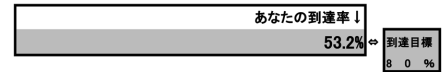
NO	視点/分類	チェック項目	自己診断			
			A	B	C	D
1	教材研究	① 教材にかかわる児童の実態に留意して、学力向上を意図した指導プランを練っている。	1			
		② 1時間の授業の中で、はぐくみたい基礎基本とその評価方法を明確にして授業に臨んでいる。		1		
		③ 1週間単位程度の週の指導計画を立案している。			1	
2	学習環境	① 教室備品などがよく整理され、落ち着いて学習に取り組める学習環境になっている。				1
		② 掲示物を工夫するなどして、学習への動機付けを図っている。	1			
		③ 掲示物や板書、児童・教師の言葉などにおいて、正しい言語環境が保たれている。		1		

～ 途中、略 ～

16	評価	⑥ 児童が自己学習目標をもって学習活動に取り組み、それを基に自己評価を行って自己学習能力を高める手だてを位置付けている。				1
		① 計画的に、必要な宿題を無理のない範囲で課している。	1			
17	宿題	② 宿題をやった成果が授業に生かされるように配慮している。		1		
		③ 児童が取り組んだ宿題の内容に目を通し、評価している。			1	
18 … 学校 課 量	* 研修 課題	① 小学校学習指導要領(国語解説編)において、自学年にかかわる内容に一通り目を通し、授業に生かそうとしている。				1
		② 国語の教科書(含・教科書指導書)の単元配列に目を通し、学習目標や内容の系統性を理解しながら授業を進めている。		1		
		③ 自分なりの個人研修テーマを掲げて、国語科における授業改善の意思をもちながら、授業に臨んでいる。			1	

評価基準	A: 日頃から、そのように努めている。	B: どちらかというと、そのように努めている。	C: どちらかというと、そのように努めていない。	D: ほとんど、そのように努めていない。
------	---------------------	-------------------------	--------------------------	----------------------

評価結果(数値)			
A	B	C	D
17	16	14	15
全 62 題中			



〈図1 授業力向上チェックリストの抜粋〉

変容を全体研修の場で確認することはしない。公開授業の際に、指導案に記載することになっている「指導者の思いや願い」のところに、このチェックリストからの自己診断を重ねて、授業構想を述べる担任が現れたのは成果である。

(2) 児童が自分の到達率に満足しながら自己教育を進めるための「学習力チェックリスト」

① チェックリストの作成

学習指導要領を拠りどころとして、国語科の低・中・高学年部ごとのねらいや目的、内容を精選し、チェック項目を設ける。中味は低学年が21個、3学年以上が23個の項目数となり、所要時間は平均10分程度（A 4判2枚）となった。自動集計により肯定的診断の割合を得点として表示するところが特徴であり、集計結果を円グラフでも表示することで、自分の学習意識の高さが直感的に見とれるよう工夫した。〈図2参照〉

② チェックリストへの記入

回答は、4つのレベルから選んでチェックするものと、設問に対し、自由に意見を書くことで個性が発揮できるようにした枠がある。年間5回の実施を試みたが、1回目の試行では、内容の理解に十分な時間をかける。ここでの理解度が今後の変容を左右する。また、中・高学年の場合、児童がエクセルファイルへ直接入力することで、担任への負担軽減ともなった。

③ 試行の結果

肯定的な自己診断の割合を得点として表示するシステムにした結果、各学年の得点（肯定的診断／項目総数×100）の平均値は表3のとおりである。

また、年間の変容の一例として、3学年を抽出し、得点平均を出した結果は表4のとおりである。

学習の力をつけるチェック表です 3年 番名前 月日

子どもがチェック！

NO	項目	分類	下のことについて、今の自分の姿をふり返り、右の中にチェックしましょう。	A	B	C	D
1	関心 意欲 態度	①	国語の授業は、好きである。 なぜ、上のように答えましたか、理由の書ける人は、書いてください。 ※ 読書は好きだけど、くわしく読むのはきらいだから。	1			
		②	国語の授業では、積極的に手を挙げています。		1		
		③	学習課題をよく頭に入れてながら、国語の授業を受けている。				1
		④	次の中で、好きな学習方法を○で囲みましょう。○は、いくつ付けてもかまいません。				
		⑤	音読 ワークシート 作文 調べ学習 話し合い 音楽のきまり テスト その他				
2	読む こと	①	教科書に書いてあるとおり、文章を正確に、音読をすることができ る。				1
		②	教科書を読んで、文章のおおそよを理解することができる。	1			
		③	文章を書いた人の一番言いたいことが分かる。		1		
～ 途中、略 ～							
5	家庭 学習	①	国語や漢字の家庭学習をたくさんしていると思う。		1		
		②	家庭朗読カードの枚数を、たくさん増やしたいと思っている。			1	
		③	分からないことがあったときは、家の人に聞くようにしている。				1

チェック結果

A	B	C	D
6	6	6	5

全 23 題中

あなたの国語の学習力は、こうなりました！

今回のあなたのチェック結果を点数にすると、右のようになりました。⇒ **52** 点

〈図2 学習力チェックリストの抜粋〉

〈表3 肯定的な自己診断の到達率の変容〉

実施学年	1回目	5回目	最終的な各担任の受け止めの中で、筆者が目じたもの
1学年	*	100%	・全てよく受け止めるため、100%からの変動はほぼないと推察し、1回のみ実施した。
2学年	99.1%	90.4%	・内容が段々と理解できると、自己診断の正確さが上昇する。
3学年	60.3%	83.1%	・自信をもって取り組む児童と、積極性に欠ける児童の差が大きく露出した。
4学年	97.6%	90.8%	・自分の中に足りない努力点を徐々に自覚できた。
5学年	55.8%	65.8%	・自分の課題をはっきりともつことが可能で、努力した自分に高い評価をください。
6学年	60.3%	71.4%	・音読方法を改善するという学年全体の目標設定に貢献した。

④ 学習に対する意識の変容

低学年は自己診断の結果が高いが、くり返し試行することで、各チェック項目の意味や大切さを理解するようになり、最終的には到達率が下がってくる。

これはしっかりと自己診断に向かい合おうとする姿勢であり、よい傾向である。中学年では謙虚な姿勢で自己診断する者と自分に自信をもって臨む者と、その個人差が明らかに出てくるのが分かった。しかし、得点の高低にかかわらず、児童全員の授業に対する意欲が高まっていることが校内授業研究で報告されている。高学年では、どうすれば数値が確実に上がるかを理解できるため、得点操作の意識がはたらくことが分かった。これはやむを得ない。担任には、「学習の目標として何をがんばろうとしているのか」と、目標を絞って取り組むことの大切さを指導してもらうように依頼した。その結果、学年全体で目指す目標が児童の中に芽生えたとのことである。

3学年児童の試行回数ごとの感想を見ると、「得点が落ちなくてよかった」「前よりも『A』が多くなってうれしかった」「『A』と『B』が1学期よりも1つ少なくなったので、2学期はがんばりたい」「授業で朗読をもっといっぱいして、朗読を好きになりたい」などと、前回との比較から自分の伸びをとらえたり、課題を明らかにしたりしている。

また、3学年の児童には、「得点を上げるなら、自分の自信のないことをがんばる」という意識が多く見られた。

〈表4 肯定的な自己診断の到達率の推移〉

実施月	5月	7月	10月	12月	2月
得点平均	60.3%	62.9%	65.5%	71.6%	83.1%

このことを踏まえ、本校児童は、長所伸長タイプか、欠点克服タイプかを調査してみた結果は、表5のとおりである。

〈表5 方法意識調査〉

学 年	自信のあるところを伸ばしたい	自信のないところを克服したい
中学年	6%	94%
高学年	44%	56%

調査後に児童と話してみると、中学年段階では、自分の力を伸ばすための課題を見つけ、そこをなんとかしようとする意識が強くはたらいっていることが分かった。これは、自分の課題を見つめながら自己教育力をはぐくんでいる姿ととらえる。また、高学年段階では、自分の性格に合わせて、得点を伸ばそうとする意欲が見え、自分に合った一人学びの意識が育ちつつあるものととらえる。実際の自己診断の場面を見てみると、友だちと隣同士で、エクセルファイルでの自己診断チェックをしながら、「〇〇さん、それはちゃんとできているんじゃない」などと声を掛け合っている。このように他者から肯定的な評価をもらうことで、自分の力に自信をもち始めた児童もいる。他者からの指摘で自己教育力をはぐくむ場面は、全学年に共通して見られることが担任からの報告で分かった。自分の努力する姿を教師や友達から褒めてもらい、認めてもらった時に「そのチェック項目に示された力が自分にはある」という喜びが生まれるということであり、学習意欲の継続に作用している。

(3) 授業の中で「できる」という喜びを実感させるために、到達目標を明確化した「わくわくチェックシート」

児童が確実に自分の力が伸びているという思いをもち、年間5回の学習力チェックリストにおいて有能感を得るには、単元単位でのレベルアップを実感させる必要がある。このためには、単元を通してどのような力を児童が身に付けるべきかを、教師と児童がともに理解していることが大切となる。山田は、「授業の展開過程で、学習者が自力で到達度をチェックし、『分かる⇒わかる⇒できる』などの自己実現過程やレベルアップによる行動過程を重視する」と言っている。この中での「分かる」対象を、山田は「評価規準」としている。しかし筆者は、この「分かる」の対象を、教師と児童がともに目指す「到達目標」と考える。そして、この到達目標をはっきりともつため、授業における自己診断チェックを生かす。山田の提唱する「わかる」という心の作用を授業での自己診断チェックで促し、「できる」という満足感や成就感を心に根付かせることで、児童の中に主体的に学ぼうとする自己教育力を育てる。

① 単元の指導計画とチェックシートの作成

まずは児童の実態と用いる教材文の特徴から、どのような指導計画で、どのような力を付けていくかを検討する。加藤は、到達目標を実現するには、以下の指導要素を組み込んだ単元指導計画を立てるのが効果的だと提唱している。

① レディネスのチェックとその養成のためのプログラム	⑥ 練り上げによる高まり合い
② 評価規準	⑦ まとめ・共有
③ ゆさふりとよびかけ	⑧ ドリルによる習熟と定着
④ 主体的な追求活動	⑨ 形成的テストと補充指導または発展学習
⑤ くさびとなる効果的な活動	⑩ 思いやこだわりの実現としての発展学習

さて、筆者は本研究の大事な背景として、多忙感を抱える教師ができるだけ効率的かつ効果的に学習指導ができるようにすることを念頭に置いている。従って、本校職員が「複雑だ」と感じるような、日々の授業に生かすにくい研究実践は、筆者にとって意味をもたない。上記の要素はどれも大切なものであるが、本研究において着実に学力を伸ばす手法としては、②、③、④、⑤を取り上げ、その他は特に触れずにおくことにした。②は「到達目標」として置き換え、③は自己診断チェックの導入で具体化し、④は授業での「わくわくチェックシート」から練り上げる。

次に、校内研修テーマに即して、低・中・高学年部ごとの物語文及び説明文の読み方を学ぶチェックシートを作る。児童の発達段階やこれまでの学習で育った力を前提とし、学習指導要領の基準性を重視してチェック項目として精選する。中味は、担任が身に付けさせたい学習方法（教材文からの学び方など）や技能なども含めて9つのチェック項目を設け、また児童が自分の挑戦してみたいことが出てきたときに、自主的に書き込めるよう空欄のチェック項目を1つ設けた。更に、同じチェック項目を単元内で適宜学習し、1回目の学習でうまく満足感を得られなくても、再度取り上げることで「できるようになった」という達成感をもたせるように、1つの項目には2回分のチェック枠を設けた。〈図3参照〉

② 指導の実際 〈対象児童 第3学年児童12名〉

単元名：説明文の読み方を学ぼう 教材名「つな引きのお祭り」〈東京書籍〉

1単位時間の授業は、以下の流れを基本とする。

〈導入〉これまで発見してきた効果的な学習方法を、教室に掲示した紙面で振り返り、一斉音読することで確認する。
その後、「わくわくチェックシート」をもとに、本時の学習めあてやその達成に向けた学び方を理解する。

・教室に掲示する紙面は、山田の提唱する指導要素⑤「くさびとなる効果的な活動」と考える。授業の中で、児童が気付いた学習方法のうち、指導者が「これは大事なこと」と認めたものを、児童名入りで打ち出したものである。最終的には、10枚の紙が教室に掲示された。〈図4参照〉

〈展開〉めあて達成に向けた学習活動を行う。

〈終末〉わくわくチェックシートをもとに、めあて達成の方法や学び方の満足感を自己診断する。

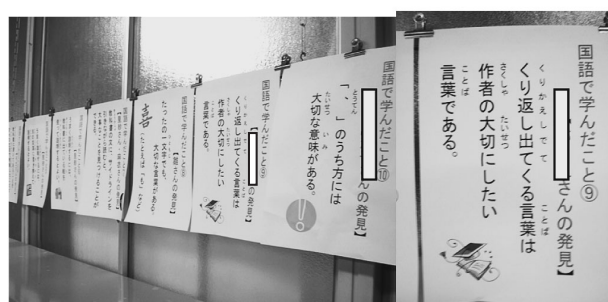
③ チェックシートへの記入

どのチェック項目をいつ学習するかは、担任が見通しをもつが、児童の思考の流れによって、担任と児童で、次の授業は何を目指していくかを確認しながら進めていく。授業での自己診断は、他のチェックリストと異なり、3つのレベルとする。これは、「よくもなく、悪くもない」と判断に迷った時には、一旦中間点に気持ちを落ち着かせるという効果を意図している。同じ学習内容をスパイラルに取り上げながら、確実に知識や能力を定着させていくという国語科の特性から、中間レベルからの変容を自己診断することも有効だと考える。

〈表6 単元の指導計画と自己診断の結果〉

時	学習活動	指導者の支援	チェックした項目
1	■題名から内容を予想して全文通読し、初めて知ったことなどをノートに書く。	・題名のみを提示し、ノートに予想を書いた後に教材文を配布することで、教材との出会いを新鮮なものにする。 ・必要に応じて、呼び鈴を活用し、間をとる。	①チェック項目D・G 「難語句」 「課題設定」 〈達成率=66.7%〉
2	■句読点を息を継ぎながら、すらすら読めるように、音読練習をする。		②チェック項目B・G 「ていねいに音読」 「課題設定」 〈達成率=75.0%〉
3	■全体を①話題提示、②説明事例1、③説明事例2、④説明事例3、⑤まとめの、5つの大きなまとまりに分ける。	・既習の重要語句のとりえ方を提示し、大切な言葉を抜かないよう、助言する。	③チェック項目C 「段落の把握」 〈達成率=66.7%〉
4	■説明事例1を、「どこで」「いつ」「どんなお祭りが行われ」「どのような特徴があるか」を中心に、5W1Hのやり方でシートに整理する。	・この時間は、指導者の指示や助言を多くし、全児童にシートの使い方理解させる。	④チェック項目A 「内容整理」 〈達成率=75.0%〉
5	■説明事例2を、「どこで」「いつ」「どんなお祭りが行われ」「どのような特徴があるか」を中心に、5W1Hのやり方でシートに整理する。	・この時間は、前時の到達度の低い児童を中心に指示や助言をする。	⑤チェック項目A・I 「内容整理」 「意見発表」 〈達成率=91.7%〉
6	■説明事例3を、「どこで」「いつ」「どんなお祭りが行われ」「どのような特徴があるか」を中心に、5W1Hのやり方でシートに整理する。	・この時間は、自力解決を目指し、到達度の高い児童に発展的な課題を提示する。	⑥チェック項目I・J 「意見発表」 「生活経験との比較」 〈達成率=66.7%〉
7	■別に用意された写真は、どの祭りの挿絵かを、文中の言葉に着目しながら考え、3つの祭りの共通点について話し合う。	・提示する教材文の挿絵は省いておき、拡大投影機の提示等によって、画像情報(挿絵)の大きさにも気付かせる。	⑦チェック項目E・H 「筆者の主張点」 「キーワード」 〈達成率=58.3%〉
8	■話題提示からまとめまでの5つの大きなまとまりをもとに、簡単な構造図のパターンを見比べながら、文章構成を理解する。	・いくつかの文章構造図のパターンを提示し、どのような構成によって、読者に伝わりやすいような工夫がされているかに気付かせる。	⑧チェック項目C・H 「段落の把握」 「キーワード」 〈達成率=100.0%〉
9	■説明文の読み方を中心に、学習全般を振り返り、おもしろかった学習方法や、これからやってみたい学習方法について、ノートにまとめる。	・指示語の扱い等、言語事項の理解を深めるため、言語にかかわるワーク集を使って、取り立て指導をする。	⑨チェック項目F 「こそあど言葉」 「つなぎ言葉」 〈達成率=83.3%〉

〈図3 3学年が取り入れた「わくわくチェックシート」の一例〉



〈図4 3年教室の側面掲示〉

④ 結果の考察

「○」または「◎」を肯定的診断とし、全回答数で割ったものを達成率として表した。〈表6参照〉3学年国語科学習の大事な要素だと筆者が考える「音読」「国語辞典での意味調べ」「意見発表」を項目に取り入れたことで、全体として児童の挙手や発言の意欲など、授業参加意識が常に高かった。この3点は、その日の学習めあてにならなくても、チェックシートの項目にあることから常に児童の中に意識されていたことを喜んでいる。

本単元の授業ごとの達成率を追いかけてみると、日々の達成率にはかなりの上下差がある。しかし、数値が低いから学習意欲や集中力が低いというわけではない。筆者は、授業終末の自己診断チェックに要する時間に着目した。そ

これはチェックシートに慣れてくると、深く自己診断するようになり、時間を掛けて自分の学び方を振り返ろうとする姿が出てきたからである。これは自己診断の結果よりも、その過程において一人学びの意識を大切にしようとする気持ちの表れととらえる。また、授業中に見られた以下の姿から自己教育力が身に付きつつあると感じる。

A：学習能力の高い児童が「自分の力だけでできた」という自己診断が増えていくことを喜んでいる声
 B：チェック1回目は「○」だったのが、同じ項目での2回目には「◎」を付ける時の嬉しそうな表情
 C：指導者には「◎」と見えても、あえて「▲」を記入し、次も継続して同じ課題に取り組もうとする姿

4 研究全体の成果

自己診断チェックを定期的に取り入れたことによる学力の変容を客観的にとらえるために、数値データの比較を行う。また、各学期2回ずつ（説明文・物語文指導）で自己診断チェックを取り入れてきた授業の成果を見るため、文章読解を中心とした学期末テストの数値も並べてみた。その結果は表7のとおりである。

〈表7 全校児童の学力推移〉 「*1学年の実施なしで、参考数値となる」

調査項目 学年	学力検査：国語偏差値		国語科：学期末の「たしかめ」〈業者テスト〉：得点					
	H18.2 NRT	H19.5 NRT	読む			言語事項		
			H18.7	H18.12	H19.7	H18.7	H18.12	H19.7
1 学年	61.8		100	100		100	93.3	
2 学年	57.6	(53.3)	100	98.0	97.5	96.0	96.0	85.0
3 学年	50.5	61	90.6	93.4	84.0	80.5	94.6	88.0
4 学年	53.6	54	92.5	85.0	93.3	92.0	88.0	95.0
5 学年	(61.7)	54.7	94.0	90.0	79.5	84.2	80.8	82.6
6 学年	(54.1)	53.6	98.3	97.1	84.0	97.0	91.6	88.6
平均値	55.9	55.8	95.9	93.9	*87.7	91.6	90.7	*87.4

残念ながら、全校としては、特に数値の上昇は見えない。NRT学力検査から見ても、現状を維持している状態である。

さて、本研究当時、筆者は3学年担任であった。従って、3学年児童には着実に自己診断チェックの活動を取り入れてきた。その学年の単元末テストの平均得点を抽出してみると、表8のようになる。定期的・意図的な自己診断チェックにより児童の学習意欲を継続させ、また、到達目標を示し、課題意識を明らかにしながら学び方の徹底を図ってきたことで、段階的に数値の上昇を得ることができた。

〈表8 3学年児童の学力の変容〉

	1 学期	2 学期	3 学期
読む	90.6	93.4	95.0
言語事項	80.5	94.6	96.3

5 おわりに

筆者は当初、自己診断チェックによって教師や児童が学習面での自分のよさを自覚し、それを伸ばしていくことが有効ではないかと考えていた。しかし、実践が進むにつれ、チェック項目によって、到達目標や課題意識を明らかにすることから自分の力を伸ばそうとする意識がはたらくことが検証できた。また、授業での学び方をチェック項目で確認しながら徹底していくことで、自分の学習の仕方に自信を付けていくことが判明した。これにより、自己診断チェックを意図的に仕組むことで学習意識の高さを継続でき、その結果として学力数値を上げることも可能だと結論づける。なお、児童と教師が一緒になって授業改善意識を高める大切さを主張するところに、他の自己診断チェックの実践との違いまたは独自性があると申し添えたい。

【引用・参考文献】

- 河野 重男編 「自己教育力を育てる」ぎょうせい 1987年 P3, P33
- 釵持 勉・山田 和也著 「学校改善プログラム52」明治図書 2007年 P13
- 上越市教育委員会 「授業改善基本チェックリスト」 2003年
- 人間教育研究協議会編集 「教育フォーラム 真の学力向上のために」金子書房 2005年 P32-33
- 山田 修平編 「国語学力を測る『到達度』チェックカード 読むこと 小学校3・4年」明治図書 2005年 P4